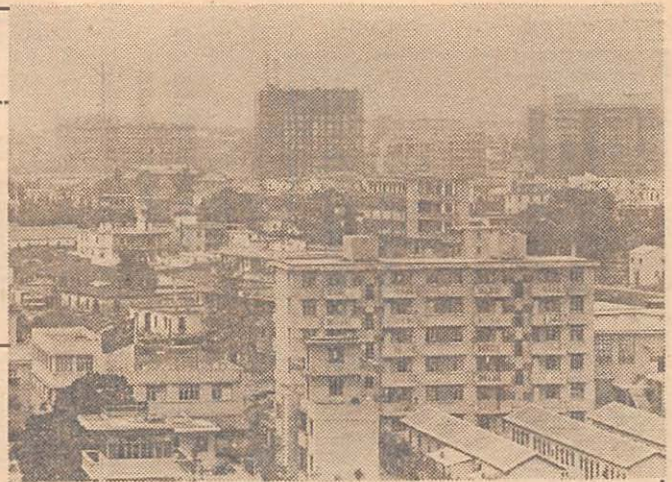


経済の土台はビルや設備だけではない（写真は香港側から中国・文錦渡特区を望む）



東京外国語大学教授 中島 嶺雄

「経済特区」と香港の将来

この夏休みの前半を利用して、台北、香港を訪れ、同時に、中国の「経済特区」として只今売出し中の深圳（しんせん）を見学した。台湾や香

港の将来も大いに気にかかる重大事ではあるが、私が台北・香港・深圳を同じ時期に訪れようと試みたには、それなりの理由があった。

「四つの現代化」を目指す中国の将来にとっての一つの選択肢は、社会主義国家としての中国が、西側諸国との経済協力もままならず、結局は「ソ連モデル」へと収斂してゆくことだと私は従来から考えてきた。

だが、もう一つの選択肢は、深圳をはじめ、珠海、汕頭、廈門といった広東省、福建省のいわゆる「経済特区」の活力がテコになって、中国大陸沿岸諸省がテイク・オフし、隣接の香港の繁栄、さらには台湾の経済的発展と直接・間接にリンクしつつ、華僑資本の大幅な流入を伴って、現代化の新しい波が中国全体に北上してゆく可能性だと考えてきた。

結論としては、右の後者のような可能性さえ当分は見込めないだろうという悲観的な見方に立たざるをえない。

今回改めて香港、台湾の繁

栄をみるにつけ、中国の「経済特区」をテコとする現代化といっても、社会現象としての「香港化」「台湾化」が先行しつつある反面、そのことが中国社会の経済的発展に資するという確たる保証はない。

深圳経済特区の現実

そのような矢先、この八月中旬には、「中国は一九九七年七月一日をもって全香港を回収する」との香港の将来にかんする胡耀邦発言が大きく報ぜられた。そのなかで胡耀邦・総書記は、「われわれは、深圳に経済特別区をつくって繁栄の典型をつくりだした。典型をつくりだせば香港の繁栄維持も実現できる」と語ったという。

では果たして、中国の経済特区では最大という深圳の現状が繁栄の典型だといえるのだろうか。今日の深圳は、文革期に訪れた頃とは大きく変わって、建設中のビルが林立し、一見工業基地らしい様相は呈している。だが、私の見たところ、ただそれだけであ

って、流通機構や交通・通信などを含むインフラストラクチャーを土台にした経済基地とはとてもいえず、香港や台北とは比べべくもない。

近い将来、大規模な総合駅も出来る予定だと現地で聞いたが、たとえ駅舎だけ立派に出来ても、それだけではお話にならない。どうも中国の指導者は、工業化ひいては経済全般について依然として根本的に認識不足ではないのか。砂塵の立つ工事現場でしかない場所にビルだけ建てれば、そこに産業社会が到来するとも思っているのではなからうか。

私の香港滞在でも、深圳の市長以下経済使節団が来香していて、深圳の未来をさかんにPRしていたが、先行き不安の香港の企業家でさえ、深圳への投資や合併企業には二の足を踏んでいる。

にもかかわらず、胡耀邦の右のような経済認識程度で、香港の帰趨が論じられるのだとしたら、香港の将来もたまたまのものではない。